

せなかもじ

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第三十四号（一日発行）
平成四年七月一日

郡役所の行政事務

近藤 芳一

(下)

この文書によると、当時の住民の細部にわたって規定されているが、これだけでは具体的なことについて触れられていない。住民にとって最も関心のあるのは税金であろう。売買、営業について規定されていることから考え、徴税に関する規定はあったのではないかと考えられるが、その資料は現在のところ不明である。しかし、明治十三年三月に当時の郡長が、十五年七月から十六年六月までの徴収予算案を作成しているが、このことに関しては後日発表する予定である。

- 第一 戸籍二口願届ノ事
- 第二 改宗改壇ノ事
- 第三 私有地売買譲渡願ノ事
- 第四 地券下与及書替願ノ事

- 第五 耕地地交換願ノ事
- 第六 船車検査及売買譲渡願ノ事
- 第七 行旅病人、棄子、迷子、変死人処分ノ事第八 求刑宣告書取り扱イノ事
- 第九 口犯戸長任免口涉ヲ除ク外身分進退ノ事

随筆

『涛声文学』のこと

古平 (十二)

古川 義雄

戦後の混乱期活字不足はひどかった。堅固な統制経済で紙が手に入らないから、本や雑誌の出版は思うように出来ず、本屋の棚は空っぽだった。古平のように、自前で何とか

- 第十 学費委員選挙ヲ認可スル事
- 第十一 公立小学校定例休日ノ外一周以内休業願ノ事
- 第十二 社寺開帳及県社以下祭典遷宮願届ノ事
- 第十三 民有社境内ノ竹木伐採願ノ事
- 第十四 官地ニ在ル私有建物売買譲引渡及書入口ノ奥書スル事
- 第十五 酒類煙草牛馬売買営業願ノ事
- 第十六 清酒搾器開閉ノ事
- 第十七 許可ヲ受タル売葉営業人ヨリ請売行商願ノ事
- 第十八 地方税二関スル諸営業願イ之事但場所ヲ限ル漁業願ハ此限非

空腹を満たすことの出来た土地では、急速に精神（こころ）の飢餓を感じるものらしい。戦前・戦中の価値観が音を立てて崩れ去った直後だけに、若者たちは新しい方向を求めて真

- 第十九 芸娼妓出稼願ノ事
- 第二十 度量衡検査ノ事
- 第二十一 証券印紙貼用帳簿検査ノ事
- 第二十二 郡村役所不要物品ヲ売却スル事



剣であった。みんな新鮮な情報を欲しがっていた。私は、戦前勤めていたコネを最大限に利用して、札幌の富貴堂まで行き、「世界」と「リーダーズダイジェスト」の月極めの契約を成功させた。一大壮挙であった。仲間の回し読みや意見の交換が始まった。

そんなさ中に、古平で我々で同人誌を作ろうと言う無謀な話しもとび出した。若者たちが話し合いを続けるかぎり、およそ不可能が影をひそめて、徐々に実像が伸び上がってくるからすごい。曲がりなりにも『涛声文学』が姿を現した。私が主幹だったようで、齊藤嘉勝君と故人の三川正君が編集者。同人に名を連ねた人は、後藤（田村）つたさん、山口（関川）春枝さん故人の齊藤清一君などが主なメンバーであった。

つづく

常に死となり合わせ やはり戦場は地獄だった

さて、それにしても戦線がどうなっているのか、明日はどうなるのかまるでわからない。ただ、今はこのとおり生きていく、確かに生きていく。たこつぽに入って寒い夜空を眺めてもう幾日過ぎたろう。先輩の一人はつぶやくように、「おん身大切に、おん身大切に」と言うのが口癖だった。この先輩の兵

戦場を想う

長さんも、チチハルでは我々少年兵を随分としごいたが、戦線では頼りない感じがした。将校も下士官もあれほど神様のように思っていたが、この戦場では裸の人間を見る思いだった。下士官は下士官で、奥さんと子どもの写真を肌身離さず大切にしている、時々俺に見せては「福井、お前はチョンガーで良かったなあ」。そして、万一の場合はお前が一番元気だから、

無線機は必ず埋めることと、暗号書は必ず焼けと言われた。たぶん死を覚悟していたのだと思う。一番下っぱの俺を頼って、何かと注意をしてくれた。しかし、どうもあの重い鉄帽だけは幾度叱られてもかぶる気にならなかった。

停戦の九月十五日までは、記憶をたどると、だんだん後退していたようだ。どんな時でも神も仏も浮かばなかった。時々母のこと、妹のことだけ。時々母

夜は時々ロシア民謡、そしてバラライカの悲しい放送と、降

伏を呼びかける宣伝が逆におもしろかった。ノモンハンには地図にも無かった湖沼があつて、そこに敵の空爆によつて、毒ガス弾が投下されたと言おうわさがたつて、給水がとぎれ苦労した。確かあの野口部隊が調査に来て、給水作業をした記憶がある。戦後知つたが、ハルピンで人体実験をした世にも恐ろしいあの部隊がノモンハンにも来て水質の検査

やら給水消毒をしていたのか。中国人、満人、ロシア人の捕虜を毒殺し、丸太でも扱うように人体解剖をしては、医学的なデータを作り、戦後はアメリカにそのデータを渡して命乞いをしたと言う丸太事件である。それはともかく、兵隊一人一人がカルキ袋を携帯するようになった。当てにならぬ給水を待

大正の末ごろ——一年生になつた夏休み、級友に誘われて沢江の川へ行きました。

そのころ古平川のことを沢江の川と呼んでいた、川へ行くりんご畑の続く小道を歩きながら、私は祖母の話しを思い出していました。「沢江の川になあ、昔はあきあじが溢れるだけ来たんだよ。」

「川の向こうにアイヌの人がいっぱいいるけども、だんだん減つてしまつてアイヌの踊りも見られなくなつた。」

広い河口近くでは子供たちが泳いだり、ざるやタオルで魚をすくつて遊んでいます。向こう岸にかやぶき

川面に映る思い出

池田 テル

つよりも、凹んだ場所を掘れば濁つていても水の出るところがあつた。雨の日なんかは、飯盒でためてそれを飲んだ。ここまで筆を走らせたのは、戦友の亡霊が私の掌を後ろから支えて、まだ書け、まだ書けと励ましてくれたからだろう。ここでひとまず筆を止め、戦友のご冥福を祈る。

の家が並んでいて、アイヌのたちが住んでいました。川底の石がきらめいています。喜び勇んですぐ裸になつて川に入ると、小魚が足をかすめます。驚いたことには、小さい魚の大群が黒くなつて上つていくのです。見るとよそのおじさんが、網ですくっているのです。それが三平皿一杯十銭とかで売りに来る「ゴリ」と言う魚でした。

いたずらっぽい男の子が、蟹をつかんで私たちに投げてよこすのです。

「ガニは石の下にいるから、石 ※(四ページ・四段目へ)」

敬老会の思い出

(上)

本間 銀朔

敬老会の思い出を少々書いてみることにしました。

敬老会は、昭和三十年に『としよりの日』が定められたことよって行われるようになったのですが、祝福する年齢が明示されていませんでした。各市町村で決めたようです。

その当時、老人は現在のよう長命ではありませんでした。招待者の年齢を七十五歳としましたが、満年齢か数え年かということになり、「老人の方には一年でも早い方がよい。」と言う伊藤町長のひと声で決まり、直ちに名簿の作成にかかりました。該当者が百七十余名、開催日は九月十五日とし、西部方面は西部保育所、浜町方面は禅源寺を借用して、二か所で開催することにしました。案内状は、浜町方面は新生婦人会、西部方面はみなと婦人会に配布を依頼しました。

当日のご馳走は、各婦人会のご協力により『鮭なべ』を作っ

てもらいました。町からはお土産として紅白の饅頭二個と「祝敬老」と染め抜いた手拭い一本でした。その後、婦人会から特別あつらいの湯飲み茶わんが贈られるようになり、この贈り物は長年続いたようでした。

当日は、西部保育所から禅源寺の会場へと、町長が祝福の挨拶をして回り、それに鈴木民生課長と私が随行しました。

この行事を三十四年まで五回

積丹半島へ鉄道敷設を

請願が運輸委員会で議決される

大正九年に町会で鉄道敷設の決議があつてから、積丹半島への鉄道敷設に執念を燃やし、激動する時代の中で町民もがんばり続けてきた。しかし時代はとうとう世界中をまきこんだ戦争に突入してしまつた。すべては戦争に勝つために国策が再優先

担当しましたが、新生婦人会長の高橋まつさん、みなと婦人会長の山口浪さんには大変ご協力をいただいたいて、本場にありがたく思つております。両会場では会員の皆さんの手踊りや余興があり、老人の方々は一日を楽しみ、帰るのも忘れていたようでした。

町からは喜寿・米寿の方に大判の座布団を一枚ずつ贈りました。中の綿は上等の綿を使い、女の方には朱色、男の方には紫色のもので、当時で一枚千円でしたが、これに該当する人は十五人も居ませんでした。

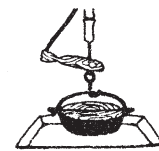
『としよりの日』として始まつたこの行事も、その後『敬老

(十)

する時代になり、軍事上重要でもない新線の建設などはとうてい無理であつた。せつかく建設された鉄道でさえ、金属資源の不足からレールを撤去されたというところもあつた。

戦争が長引くにつれ、人々の生活もその日を生きていくこと

会」となり、平成三年の敬老会招待者名簿を見ると四百十一人と、昭和三十年当時と比較すると二・四倍になっていきます。本場に老人は長命になりました。そういう私も、平成二年から招待をされるようになりました。随分と長生きをいたしました。



今年で敬老会も三十七回を数えることとなります。

に疲れ「鉄道があれば——」という思いはあつても、鉄道敷設などということはずでに遠い夢でしかなかつた。

やがて戦争も終わり、荒れ果てた国の復興に鉄道の整備が急務とされ、昭和二十二年九月、運輸省札幌地方施設部が本道の鉄道予定線のうち、資源開発に特に重要な役割を果す十線・千五百キロを選んで新線五カ年計画を立てた。だがこの計画も当時の駐留軍の意向により、特殊なものを除き新線の建設は全面的に中止された。

その後鉄道建設審議会が設置されたのを機に、古平町は町長ほか十五名をもって再び国会へ請願をし、これが採択された。

二十世紀初めの古平郡

明治四年、開拓使古平出張所が置かれることになり、種田徳之丞から本陣の建物を買って、役所と役宅にした。このころから永住者が次第に多くなってきた。明治三年、古平を实地検分したある人の記録に「人家四、五百軒あり。岩内に次々場所である。」とあり、四年の記録には「三百十戸」とあるが、明治五年、人口調査を行った結果では、三百四十七戸、千二百二十二人となっていて、これがほぼ正確な数と思われる。永住者が増えると、それにつれて商人の移住してくる者も増えてきて、町の区画なども改めたり、旧地名を改めて新しく村名や町名をつけたところも数か所あった。

その後、役所の組織替えや名称の変更などがあつたが、明治十年、古平は小樽分署の管轄となり、第五大区区務所が置かれた。これは後志を六大区に分けたもので、古平・美国・積丹の三郡が第五区であり、古平町内をさらに二つの小区に分けた。

第五大区区長は出羽佐太郎が申し付けられた。出羽佐太郎は、日露戦争で勇名を馳せた、のちの海軍大将・男爵出羽重遠の父である。古平町には、この出羽重遠の書が残っているが、関口家の墓碑銘も書いている。郡としての状況は、十七年に

【今日はこんな日】 義務制の女子青年学校開校 和裁・洋裁のほかに竹やり訓練

[昭和16年]

昭和十四年、青年学校が義務制になったのに続いて、女子も義務制になり、古平国民学校に併置された。専任の教員が配置になったが、国民学校の先生の兼務や町内からの指導員によって運営されていた。

昭和十六年には、男子百二十人、女子三十人が在学していたが、その後の人数は不明である。国語・数学・国史・地理・公民などのほか、女子は和裁・

町村戸長を廃止して、郡役所の直轄となったが、このころから農民の移住して古平河畔の地を開墾する者が増えてきた。

十九年に郡役所が廃止になり小樽郡役所に合併になったが、三十年には小樽支庁の管轄となった。

鯨漁が盛んになるにつれて商業も繁盛し、農業も盛んになってきた。三十二年の調査では、すでに戸数九百九十一戸、人口五千四百五十三人であった。

洋裁の時間が多かった。男女共に軍事教練があつたが、女子は竹やり訓練であつた。

昭和二十年、専任校長として余市中学校から新保昇止校長が赴任し、専任教員も四人になったが勤労働員などで忙しく、夜間に授業をする日もあつた。

戦後、青年学校は内容を変えて六・三制になるまで続いた。(元青年学校教員・飯沢恒さん、清住・長内千鶴子さん)

※(二ページより)

をぶつつければ出て来るとオなるほど、蟹がぞろぞろ出てきます。妹は、砂を掘った水たまりに入れた小魚を覗いては喜んでいます。帰るころになると友達が、「また来いね、冬だつて遊べるよ」冬、氷が張ると、橇を滑って遊んでいたようです。その後夏になると、よくそこへ行って遊びました。

長い間絶えていた蛙の遡上が見られる今、あのゴリの大群もいるのでしょうか。遊ぶ子供たちの姿を見ることがなくなつた今の川、橋の上をバスで通る度に、この川での昔のことが懐かしく思い出されます。

『安可贈御礼』

- 軍隊用水筒 一個
- 西島 新一さん
- 坑内用カンテラ 一灯
- 高橋 健一さん
- わらじかけ 一足
- 若松 定衛さん
- 卓上ランプ 五灯箱入り
- 宝海寺(西館昌巳さん)
- 高野名幸作さん日記四十八冊
- 高野名正治さん